

# 在日中国人留学生におけるBigFive性格特性と ストレスコーピングの関連についての研究

社会学研究科社会心理学専攻博士前期課程1年

施 竣 訳

社会学部社会心理学教授

松田 英子

ストレス社会を背景に、性格特性がストレスコーピングの選択に与える影響に関して心理学の観点から検討されている。本研究はBigFiveで測定する性格特性とストレスに対するコーピングの選択との関連性に着目し、在日中国人留学生117名を対象に、性格特性によってどのようなストレス対処方略を選択するのかを調べることを目的として、BigFive尺度（姚・梁，2010）とストレスコーピング尺度（尾関，1993）を用いたWEBアンケートを実施した。

重回帰分析の結果、情緒不安定性が高く、開放性が高く、調和性が高い性格特性を持つ留学生ほど問題焦点型ストレスコーピングを選択する傾向がみられた。また、開放性が高い留学生は、問題焦点型ストレスコーピングと同様に情動焦点型ストレスコーピングおよび回避型ストレスコーピングも選択する傾向がみられた。すなわち、在日中国人留学生のストレスコーピングに最も関連した性格特性は開放性であり、つまり、開放性が高い人はコーピングスキルが高く、選択されるコーピングの種類も多様であることが示唆された。男女別に重回帰分析を行った結果からは、在日中国人留学生の男性はストレスフルな状況であっても自分一人で対処する傾向があることが確認された。在日の中国人留学生の女性は他人に相談し、協力を求める傾向があることが示された。今回の研究は在日中国人留学生のストレスコーピング研究やパーソナリティ研究の基礎資料の一つになりうるであろう。また、本研究では在日中国人留学生の性格特性と性別によってストレスコーピング方略の選択が異なるという知見が見出され、異文化におけるストレスフルな状況下でのコーピングの方略を予測する手がかりになる可能性があると考えられる。

キーワード：BigFive, ストレス, ストレスコーピング, 在日中国人留学生, 性差, コーピ

ングの柔軟性

## 問題

### ストレスとストレスコーピングの種類

ラザルスら (Lazarus & Folkman, 1984) はストレスを人と環境との関係で捉え、「人が出来事などと遭遇し刺激を受けた際に、その刺激に対するストレッサーの脅威度の1次評価と対処可能性の2次評価の2つの認知的評価のプロセスからストレス反応が決まる」法則を提唱している。つまり、環境ないし環境の中の出来事そのものではなく、その人の認知的評価を通して理解された自分と環境との関係のあり方がストレスをもたらすのである。

ストレスフルな出来事に遭遇した人は、それを自分の手に負えるものとするための様々な試みをしようとするが、その過程を対処 (コーピング; coping) という (池上・遠藤, 2019)。コーピング方略は大きく3つに分類される。一つ目は問題焦点型コーピングであり、環境に対して変化をもたらそうとする建設的な試みである。二つ目は情動焦点型コーピングであり、情動を制御することへの試みである。三つ目は回避・逃避型コーピングであり、時間が解決するのを待つことである。この3つのコーピング方略は同時に成立しうる。ストレスフルな状況に遭遇したとき、用いたコーピングがうまく機能しなかった場合、効果的でなかったコーピングの使用を放棄し、新たなコーピングを用いる能力としてのコーピングの柔軟性も検討されている (加藤, 2001a) 一般には、状況を変えられる場合には問題焦点型コーピングが、変えられない場合には情動焦点型コーピングがより効果的であるとされている (池上・遠藤, 2019)。

### ストレスコーピングとストレスに対する認知的評価の関連

ストレスに対処する際のコーピング方略に影響を及ぼす要因として、ストレスの認知的評価があげられる。森本・木下・嶋田 (2011) では、個人のストレスに対する認知的評価がコーピングの選択にも影響することが示された。まず、情動焦点型および回避型コーピングは、問題焦点型コーピングに比べて、個人がネガティブと評価する事柄の制御・除去に焦点が当てられて、ストレッサーから逃れるために選択されることが多い。一方で、個人がポジティブと評価する事柄の制御・獲得に焦点が当てられた場合、問題焦点型コーピングが選択される傾向が強いことを示した (森本・木下・嶋田, 2011)。

ストレスに対する認知的評価がコーピング方略の選択に影響を与えることはスポーツ分野でも研究されている (Kim & Duda, 2003)。Kim & Duda (2003) はスポーツ選手を対象にストレスフルな状況 (試合) でストレスコーピングの選択と解消効果を検討した。その結果、ストレスフルな状況を変化させることが可能と判断した場合に問題焦点型コーピングと

情緒焦点型コーピングが選択されることが示唆された。一方で、ストレスの多い状況をコントロールできないと考える人は、回避・逃避型コーピングをより多く使用することが示された。状況をコントロールできないと考える人に比べて、コントロールできると考える人のほうがより積極的にストレスコーピングを行っていた (Kim & Duda, 2003)。

### 日本の大学生における性格特性とストレスコーピングの選択との関連

ストレスコーピングと関連する要因に性格特性があげられる。性格特性に関する研究では、外向性、情緒不安定性、開放性、誠実性、調和性の5因子からなるBigFive尺度が、共通文化性がある代表的な尺度として使用されている。BigFiveとストレスコーピングの関連については、以下のような研究がなされてきた。神原・岩淵 (2013) は、大学生を対象にして、性格特性と対処行動の選択との関連を検討した。その際に60項目からなるBig Five尺度 (和田, 1996) と全般的なストレスコーピングを測定するコーピング尺度 (尾関, 1993) が使用され、誠実性が高いほど問題焦点型コーピングを、外向性が高いほど情動焦点型コーピングを、情緒不安定性が低いほど回避・逃避型コーピングを選択することが明らかになった。

その他、遠藤・松田・柴田 (2017) では、BigFiveと対人ストレスコーピング (加藤, 2000) に焦点を絞り調査した。結果、ポジティブ関係コーピングは外向性および開放性と強い正の関係が示された。ネガティブ関係コーピングは調和性と強い正の関係が示された。解決先送り関係コーピングは誠実性と強い正の関係が示された。

これらの先行研究の結果に見られる不一致は、使用したコーピング尺度の差異や想定されるストレス場面、後述するストレスに対する認知的評価の個人差による影響と推測される。

### 中国の大学生におけるストレスコーピングおよび性格特性と性差

中国の大学生についても同様に、BigFiveとストレスコーピングのそれぞれの性差のみ検討がなされている。

顾・奚・程・吴・王 (2014) は、18歳から22歳の中国江蘇省の大学生4588人を対象に、BigFiveと性差の関連について検討した。その結果、情緒不安定性、調和性はいずれも男性より女性の方が有意に高かった (顾・奚・程・吴・王, 2014)。

冯・彭 (2017) は18歳から22歳の中国湖南省の大学生2415人を対象にストレスコーピングの選択と性差に関する調査を実施した。その結果、男性より女性の方が情緒焦点型ストレスコーピングを選択することが明らかとなった (冯・彭, 2017)。

しかしながら、BigFiveをはじめとする性格特性とストレスコーピングの関連についての研究がほとんどなく、検討が十分になされていない。

## 留学生を対象としたストレスコーピング研究

王・横山（2009）の先行研究によると、10人の中国人留学生に異文化適応に関するインタビュー調査を行った結果、対人関係においては「精神健康状態が健康のまま」、「精神健康状態の改善がみられた」、「精神健康状態が問題ありのまま」のいずれのパターンでも、留学初期は対人交流関係が希薄になり、孤独感があり、少数特定の自文化留学生同士とのサポートに留まるかサポートが得られない状況にあった。その他にも、問題回避行動が生じ、身体症状の悪化や生活リズムの乱れがみられた。また、「精神的な健康状態に問題がある」パターンの留学生は、自文化の留学生同士と疎遠になり、不適応の悪循環に陥っていた。

このように留学生は留学の初期からストレスフルな状況に置かれやすく、適切なコーピングを選択することでその状況を改善することにつながるが、有効なコーピング方略は状況に応じて変化すると考えられる。まず自分の取りやすいコーピング、あるいは選択されにくいコーピングを認識することが、コーピングスキルを向上させるために役立つと考えられる。

しかし、在日中国人留学生のBigFiveとストレスコーピングを取り上げる研究はまだ少ない。留学生がどのようなコーピング方略を選択するかを検討することで、異文化適応におけるサポートを促進し、ストレスの緩和のみならず、異文化適応問題に対する有効な対処につながるため（Fontaine, 1986）、異文化の環境にいる中国人留学生を対象としたストレスコーピング研究には意義があると考えられる。

## 本研究の目的

本研究は、在日中国人留学生のBigFiveおよび性差とストレスコーピングの関連について検討することを目的とする。

## 方法

### 調査対象

日本の大学に在学する中国人留学生128名を対象にしてWEBアンケート調査を実施し、合計117名（男性45名、女性83名、平均年齢22.14歳（SD=2.36））から回答を得た（有効回答率91%）。

### 調査実施期間

調査は2021年9月26日～10月10日に実施した。実施にあたりWEBアンケートサービスを提供するサイトwjsx.cnにて質問紙を作成し、WeChatを通して依頼した。

### 質問項目

フェイスシートを含めて合計77項目のアンケートを作成した。BigFiveに関する質問60項目、日常的に使用しているストレスコーピングを測定する質問14項目、合計74項目で構成される質問を設定した。

(1) BigFiveの測定

BigFiveを測定するために姚・梁 (2010) のBigFive尺度を用いた (NEO-FFI)。第1因子「外向性 (E)」12項目, 第2因子「情緒不安定性 (N)」12項目, 第3因子「開放性 (O)」12項目, 第4因子「誠実性 (C)」11項目, 第5因子「調和性 (A)」13項目を測定する合計60項目から構成される。全て7件法を採用し, 採点方法は「とても当てはまる (7点)」から「全く当てはまらない (1点)」の7件法で, 得点が高いほど該当する性格特性が高いとされ, 各下位尺度に属す項目への回答値 (選択肢の数値) を合計して尺度得点を算出した。

(2) ストレスコーピングの測定

ストレスコーピングを測定するための代表的な尺度を開発した尾関(1993)では, 「最も強くストレスを感じていること」について記述し, それに対して「現在どのように考えたり行動しているのか」と回答を求めたが, 本研究では性格と普段よく使うコーピングの関連性を研究するため, 特定の状況を指定せず「最も強くストレスを感じていること」を「普段ストレスを感じた時によく使う」に教示文を変更して回答を求めた。

普段ストレスを感じている時の対処行動については尾関(1993)と同様に, 「まったくやらない (0点)」から「いつもしている (3点)」の4件法, 20項目で回答を求めた。

結果の処理方法

分析にはIBM SPSS Statistics 25を用いた。まず, BigFiveの5因子とコーピングの3因子の性差を検討するため, *t*検定を行った。次にコーピングとBigFiveの相互関係を分析するために, コーピング尺度を基準変数, BigFiveを説明変数とする重回帰分析を行った。最後に, コーピングとBigFiveの関連において, 男女別にBigFive各因子と3つのコーピング方略との重回帰分析を行った。

Table1. BigFive性格特性5因子とストレスコーピング3因子における性差の*t*検定(N=117)

		全体		男性		女性		<i>t</i> 値
		<i>M</i>	( <i>SD</i> )	<i>M</i>	( <i>SD</i> )	<i>M</i>	( <i>SD</i> )	
BigFive	外向性	48.692	(2.523)	49.093	(8.115)	48.460	(12.700)	.294
	情緒不安定性	51.863	(10.617)	46.628	(8.910)	54.905	(10.389)	-4.372***
	開放性	55.274	(8.469)	54.070	(9.148)	55.973	(8.029)	-1.174
	誠実性	48.368	(8.980)	51.070	(7.917)	46.797	(9.235)	2.539*
	調和性	57.188	(7.821)	56.767	(7.508)	57.432	(8.038)	-.442
コーピング	問題焦点型	7.299	(2.523)	6.488	(2.472)	7.770	(2.447)	-2.722**
	情動焦点型	5.188	(2.101)	5.000	(8.115)	5.297	(2.150)	-.737
	逃避・回避型	6.889	(2.690)	6.605	(2.592)	7.054	(2.749)	-.870

\**p*<.05, \*\**p*<.01, \*\*\**p*<.001

Table2. ストレスコーピングと性格特性の重回帰分析結果 (N=117)

説明変数	問題焦点型ストレスコーピング			情動焦点型ストレスコーピング			回避・逃避型ストレスコーピング		
	$\Delta R^2$	F値	$\beta$	$\Delta R^2$	F値	$\beta$	$\Delta R^2$	F値	$\beta$
BigFive	.206	7.023***		.282	10.131***		.135	4.614**	
外向性			.206			.146			.117
情緒不安定性			.283*			-.036			.034
開放性			.256**			.386***			.362***
誠実性			.058			.141			.038
調和性			.227*			.103			-.195

\* $p < .05$ , \*\* $p < .01$ , \*\*\* $p < .001$ 

Table3. ストレスコーピングと性差の重回帰分析結果 (N=117)

説明変数	問題焦点型ストレスコーピング						情動焦点型ストレスコーピング						回避・逃避型ストレスコーピング					
	男性		女性		男性		女性		男性		女性		男性		女性			
	$\Delta R^2$	F値	$\beta$	$\Delta R^2$	F値	$\beta$	$\Delta R^2$	F値	$\beta$	$\Delta R^2$	F値	$\beta$	$\Delta R^2$	F値	$\beta$			
BigFive	.183	.027*		.185	3.731**		.322	4.998**		.231	5.382***		.039	1.196		.139	3.335**	
外向性			.175			.201		.137			.149		.034			.116		
情緒不安定性			.202			.224		-.106			-.077		.083			-.044		
開放性			.384*			.230		.511**			.297*		.347			.386**		
誠実性			.269			-.018		.103			.174		.171			-.013		
調和性			.020			.312*		.115			.057		-.155			-.159		

\* $p < .05$ , \*\* $p < .01$ , \*\*\* $p < .001$ 

## 結果

まず、BigFiveとコーピングの性差を検討するため、 $t$ 検定を行った(Table1)。その結果、男性中国人留学生より女性中国人留学生の方が情緒不安定性と問題焦点型コーピングが有意に高かった ( $t(115)=4.372, p<.001$ ;  $t(115)=2.722, p<.01$ )。一方、男性中国人留学生は中国人女性留学生より誠実性が有意に高かった ( $t(115)=2.539, p<.005$ )。外向性、開放性、調和性、情動焦点型コーピング、回避・回避型コーピングには有意差がみられなかった。

次に、BigFiveがストレスコーピングに及ぼす影響を検討するため、強制投入法による重回帰分析を行った (Table2)。その結果、3種類のストレスコーピングに対するBigFiveの説明率は有意であった。問題焦点型コーピングは、情緒不安定性、開放性、調和性が高いほど選択する傾向がみられた ( $R^2=.206, \beta=.283, p<.05$ ;  $\beta=.256, p<.01$ ;  $\beta=.227, p<.05$ )。開放性が高いほど情動焦点型コーピング ( $R^2=.282, \beta=.386, p<.001$ ) 及び回避・逃避型コーピング ( $R^2=.135, \beta=.362, p<.001$ )を選択する傾向が見られた。

最後に、BigFiveがストレスコーピングに及ぼす影響が性差により異なるかを検討するため、強制投入法による男女別に重回帰分析を行った (Table3)。その結果、問題焦点型コーピングにおいて男性中国人留学生は開放性が高いほど問題焦点型コーピングを選択し、女性中国人留学生は調和性が高いほど問題焦点型コーピングを選択していた ( $R^2=.183, \beta=.384, p<.05$ ;  $R^2=.185, \beta=.312, p<.05$ )。情動焦点型コーピングは、男性中国人留学生と女性中国人留学生のいずれも開放性が高いほど情動焦点型コーピングを選択する傾向がみられた ( $R^2=.322, \beta=.384, p<.05$ ;  $R^2=.231, \beta=.312, p<.05$ )。回避・逃避型コーピングは女性中国人留学生のみ、開放性が高いほど回避・逃避型コーピングを選択する傾向があった。 ( $R^2=.139,$

$\beta = .386, p < .01$ )。男性中国人留学生は BigFive と回避・逃避型コーピングの関連がみられなかった。

## 考察

本研究は在日中国人留学生を対象にして、神原・岩淵 (2013) の追試的な調査を行った。の結果、在日中国人留学生のストレスコーピングに最も影響を与えた因子は開放性であり、すべてのコーピングとの関連がみられた。「開放性」は「チャレンジ力」とも言われ、心の連想の広がりや拡散的思考、芸術的感受性と関連するとされている (加藤, 2001b)。開放性が高い人はストレスフルな場面であっても1つのコーピング方略に拘らず、複数のコーピング方略を選べるため、在日中国人留学生においてはもっともコーピングスキルの高さに関連したと推測される。

問題焦点型コーピングは情緒不安定性、開放性、調和性が高いほど選択する傾向がみられた。神原・岩淵 (2013) の誠実性が高いほど問題焦点型コーピングを選択する結果と一致しなかった。情緒不安定性はネガティブな感情の反応を示す特徴があり (Oliver, 2001)、情緒不安定性が高い人はストレスフルな場面で動揺しやすく、問題そのものに固着し、問題焦点型コーピングを使用する傾向がみられたと考えられる。調和性の高さは協調性、向社会的行動、他者への愛情や思いやりを意味する (Oliver, 2001)。調和性が高い人がストレスを感じる時、他人に協力を求め、多人数で問題を対処すると考えられる。すなわち、情緒不安定性と調和性が高い人は積極的に問題に対応し、周囲の人に助けを求める結果、現在の状況はコントロールできる状況と認識しやすくなると推測される。

ストレスコーピングと性差に関して、本研究では男性中国人留学生より女性中国人留学生の方が問題焦点型コーピングを選ぶ傾向がみられた。女性はストレスを感じた時、友人に協力を求める傾向が男性よりもみられ (郝・闫, 2016)、男性より女性は情緒不安定性が高く情緒の制御が苦手と考えられ、そのため問題焦点型コーピングを選択する傾向が高まったと考えられる。従って、中国人性留学生にはストレスフルな場面に遭遇して、周囲の友人や留学生同士に協力を求め、他人と共に問題を乗り越える問題焦点型コーピングを選択する傾向が高まったと推測される。

男女別の重回帰分析の結果から、男性中国人留学生は開放性が高いほど、女性中国人留学生は調和性が高いほど、問題解決型コーピングを選ぶ傾向がみられた。中国社会におけるジェンダー観では、男性は困難や問題に直面したときに、助けを求めることは弱さの表れと捉えられ、あるいは男性のプライドを保つための手段であるという囚われがあるため、男性は女性より助けを求めにくくなると考えられる (郝・闫, 2016)。従って、女性中国人留学生の方が調和性高いほど、問題焦点型ストレスコーピングを選択する傾向がある。中国国内の

研究によると、冯・彭(2017)はストレスフルな状況で男性中国人大学生は自分一人で対処する傾向があり、女性は他人に相談し協力を求める傾向があるという結果を示唆している。今回の結果から、男性中国人留学生はストレスに対して柔軟に対応する開放性、女性中国人留学生は人とのコミュニケーションを重視する調和性の影響力が強いことと関係がある可能性がある。

以上をまとめると、本研究では日本の大学に在学する中国人留学生117名を対象にしたWEBアンケート調査によって得られた知見に基づき、在日中国人留学生のBigFive性格特性とストレスコーピングの方略の問題を調査した結果、在日中国人留学生のストレスコーピングに最も影響を与えた因子は開放性であった。開放性が高い人はコーピングスキルが高く、コーピング方略も多様といえる。すなわち、開放性が高い人はストレスに対して柔軟な対応が出来て、状況に応じて適切なコーピングを選択できると考えられた。

そして、男性の在日中国人留学生は女性の在日中国人留学生より相対的に開放性が高く、女性の在日中国人留学生は男性の在日中国人留学生より相対的に調和性が高く、ストレスに注目し問題解決型コーピングを選ぶ傾向があることが示された。本研究では在日中国人留学生の性格特性と性別によって全般的ストレスに対処するストレスコーピング方略の選択が異なるという知見が得られた。よって本研究の結果は、在日中国人留学生を対象にしたストレス研究やパーソナリティ研究の基礎資料の一つになりうるであろう。日本文化への適応を試みる中国人留学生における性差と性格がストレスコーピング方略の選択によって異なることが示唆され、異文化適応に効果的なコーピングを選択させるための心理教育を行うための手がかりになる可能性があると考えられる。本研究では性格特性と普段よく使うコーピングの関連性を研究したが、今後の研究では、想定されるストレス場面の違いが在日中国人留学生のコーピング方略や柔軟性にどのような影響を及ぼしているかを検討する余地がある。さらに、今回検討できなかった民族差が自文化、異文化適応とストレスコーピングの選択に与える影響も今後の研究課題とする。

## 引用文献

- 遠藤真名美・松田英子・柴田良一 (2017) . Big Fiveパーソナリティが対人ストレスコーピングに及ぼす影響—認知的評価媒介モデルの検証—. 江戸川大学紀要, 27, 335-341.
- 冯永辉・彭运石 (2017) . 青少年压力与吸烟行为的关系：人格与性别的调节作用.心理与行为研究, 15(5), 697-701.
- Fontaine, G. (1986) . Roles of social support systems in oversea relocation: Implication for intercultural training. International Journal of Intercultural Relations, 10, 361-378.
- 顾寿全・奚晓岚・程灶火・吴正国・王国强 (2014) . 大学生大五人格与心理健康的关系. 中国临床心理学杂志, 22(2), 254-356.



- 郝雁・闫琼（2016）.某高校大学生心理压力与应对方式的实证研究.中国医学伦理学, 29(3), 1001-8565.
- 池上知子・遠藤由美（2019）. ストレスと対処(コーピング) グラフィック社会心理学第2版, サイエンス社, 2(16), 260-264.
- 神原将・岩淵千明（2013）. 性格特性とストレスコーピングの相違に関する研究. 日本心理学会大会発表論文集, 77, 36.
- 加藤司. (2000) . 大学生用対人ストレスコーピング尺度の作成. 教育心理学研究, 48(2), 225-234.
- 加藤司 (2001a). コーピングの柔軟性と抑うつ傾向との関係. 心理学研究, 72(1), 57-63
- 加藤司 (2001b) . 対人ストレスコーピングと Big Five との関連性について. 性格心理学研究, 9(2), 140-141.
- Kim, M. S., & Duda, J. L. (2003) . The coping process: Cognitive appraisals of stress, coping strategies, and coping effectiveness. *The sport psychologist*, 17(4), 406-425.
- Lazarus, R. S., & Folkman, S. (1984) . *Stress, appraisal, and coping*. Springer publishing company.
- 森本浩志・木下奈緒子・嶋田洋徳（2011）. コーピングの選択理由尺度の作成と信頼性・妥当性の検討. ストレス科学研究, 26, 33-39.
- Oliver, P. J. P. (2001). The “Big Five” factor taxonomy: Dimensions of personality in the natural language and in questionnaires. In L. A. Pervin (Ed), *Handbook of personality: Theory and research* (pp. 66-100) . New York: The Guilford Press.
- 尾関友佳子（1993）. 大学生用ストレス自己評価尺度の改訂：トランスアクションナルな分析に向けて. 久留米大学大学院比較文化研究科年報, 1, 95-114.
- 和田さゆり（1996）. 性格特性用語を用いたBig Five尺度の作成. 心理学研究, 67(1), 61-67.
- 王飛・横山恭子（2009）. 中国私費留学生のメンタルヘルス変化傾向と関連要因—2年間のインタビュー追跡調査を通して. 上智大学心理学年報, 33, 109-125 .
- 姚若松・梁乐瑶. (2010) . 大五人格量表简化版（NEO-FFI）在大学生人群的应用分析. 中国临床心理学杂志, 18(4), 457-459.

# **A Study of the Relationship between Big Five Personality Traits and Stress Coping of Chinese students in Japan**

SHI, Junyi  
MATSUDA, Eiko

## **Abstract:**

Within the context of a stressful society, several studies have examined the influence of personality traits on stress coping choices. This study focused on personality traits and coping choices for stress in the Big Five, and aimed to investigate what kind of stress reduction methods Chinese students in Japan choose depending on their personality traits. A web-based questionnaire using the Big Five Inventory (Yao and Liang, 2010) and the stress coping scale (Ozeki, 1993) was developed and administered (n=117).

Multiple regression analysis revealed that international students with higher emotional instability, higher openness, and agreeableness harmony tended to choose problem-focused stress coping. In addition, the students with higher openness level were found to be more associated with emotion-focused stress coping and avoidance stress coping. In other words, openness was the most influential factor on stress coping among Chinese students in Japan, suggesting that those who were more open tended to have better and more flexible coping skills. The results of multiple regression analysis by gender showed that male Chinese students in Japan tended to cope with stressful situations on their own. The results indicate that female Chinese students in Japan tended to seek social support, such as advice and cooperation from others. This study may serve as a basis for research on stress coping and personality of Chinese students in Japan. In addition, the choice of stress coping strategies in this study differed in the personality and gender of the Chinese students. This may provide clues for predicting coping strategies in stressful situations from different cultures.

**Keywords:** Big Five, Stress, Stress-coping, Chinese students in Japan, Coping Flexibility